

# 芥川だより

発行日\*\*\*2016年2月1日 e-mail:akutagawa\_dayori@yahoo.co.jp  
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集発行人 下村嘉明

発行所

☆ 着物から服へ

着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2 -1 4 -3

TEL072-681-8870



\*\*\*\*\* 一部100円です \*\*\*\*\*

## 坂道



夜明け前に堤防を歩いているといつも同じ人とすれ違う。小柄で飛びはねるように歩く婆さんや大きなヘッドランプをつけ大きな声で挨拶する背の高い男性、身体を横に傾かせながら黙々と足早に歩いている爺さんなど4、5人いる。

六甲山でも、いつも同じ人に出会う。彼は50才位でペットボトルを手に持って下りてくる、たぶん3時間位は歩いているに違いない。夏休みに六甲へ通った時も毎日おなじ娘が私を追い越して登って行った。彼らを見ていて私は「どうしてみんな好んで歩くのか？」と不思議に思った。

私は、筋炎になってリハビリをしていて気づいた事がある。筋肉は筋肉痛を起こすぐらいの運動をして筋を傷つけないと強くならない。ここが限界だとすぐに思ってしまうが、そこからどれだけ頑張れるかで筋肉がつく量が決まる。肉体的には余裕があるのに精神的についていけなくてもうダメだと弱音をすぐに吐くが、そこを如何に乗り越えられるかが重要な意味を持つ。肉体的、精神的な苦痛に耐えもう一步前進が出来るか出来ないかが勝負の分かれ目である

疑り深い私の心は納得せず更に問うてくる。「なんで、ここまでやるのや？」この問い掛けを毎度くりかえして、ふと気づいた。もしかして、心も筋肉と同じではないかと。毎日、厳しい試練を心に与えなければ心も強くならない。少しでも油断をするとたちまち心はなえてしまう。心も筋肉と同じような生き物であると想像したのである。坂道はつらいから値打ちがあるのである。坂道をのぼり続けることが心と体を元気にしてくれる。坂道を登り少しずつ太い心をつくる。入院するとすぐに歩けなくなるように心も安穏としておればひ弱になる。これまで多くの失敗や挫折などで心を幾度も傷つけてきた。その心の傷が心を太く強くしてくれているのだと悟った。私の限界はまだまだ先にある。

## 死をめぐるあれやこれ(17)

冬木立

石川 吾郎

幸い府立植物園の近くに住まっているので、週に一二度はカメラをもって散策している。

この季節、花はほとんど咲いておらず派手な色彩は少ない。木々は葉を落として冬枯れている。しかし私は厳冬の疎林が好きだ。葉を落とした木々の細かな枝が澄み切った青空をアラバスク模様に分している。樹種によって微妙にそのパターンが違っている。木々の下にはシダ類が葉の裏に胞子の玉を行儀良く並べている。

一見、木々は枯れ死んでいるかのようだが、それは違う。葉を落とした細枝には、ちゃんと冬芽を付けている。小さく目立たないものが多いが、辛夷のように気持ちのよい綿毛を付けた蕾もあるし、オオカメノキという木の冬芽ときたらバルタン星人そっくり。どの木も春の準備に怠りない。

この国も昨年の安倍政権(政権というより「一味」といったほうがびつたりくる)による憲法クーデター以来、真冬の季節に突入している。そして彼らはさらに平和憲法を変えて「緊急事態事項」というもので、ナチスなみの独裁国家に作り替えることを宣言した。今年の七月の参院選と、同時選挙にするとも言われる総選挙が決定的なカギになる。これで改憲勢力が三分の二を占めるようなことがあれば改憲を許してしまう。このときこの国は再び七十年前の破局の極北へと向かうだろう。そして一味はマスコミを操り、国民の目を反らす狡猾な情報戦略を使っている。

しかし国民はそれにだまされるほど愚かでないことを信じていたい。

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
マスコミが伝えないニュースの側面	伊藤明	2
安全法制を哲学する	祖蔵哲	5
闘病記 32	下村嘉明	8
おっちょこちょいほけ 35	A O	9
素老人☆よだ帳 23	坂本一光	10
大人の今昔物語 19	石川吾郎	11
孫ワオツチング 2	圭	12
B級サラリーマン渡世譚 31	明石幸次郎	12
社会状況とカタカナ語	大江雅克	13
追悼 小川先輩	嘉	15
女90年の軌跡	眞純	16
俳句	土田裕	16

## みんなで知ろう日本の危機 マスコミが伝えないニュースの側面 ⑧

伊藤 明

### 甘利汚職事件をめぐる

この一ヶ月間もつとも注目を浴びたニュースは、甘利明経済再生担当相の汚職事件でしょう。『週刊文春』がスクープで報じた疑惑は、都市再生機構URとトラブルを抱えた建設会社が甘利氏の事務所へ解決を依頼し、秘書が口利きした見返りに一三年八月に五百万円受け取ったほか、一四年には新たなトラブルが発生して事務所が交渉を進めていたというもの。甘

利への百万円の献金を含め、建設会社が提供したのは約千二百万円とされます。

くわしい内容は他に譲りますが、大臣室で手みやげを装った羊羹の下にカネの入った封筒が入っていたのを自身が受け取ったといった内容は、「甘利に」陳腐で時代劇めいてあきれる他ありません。一週間の調査と称して時間稼ぎをして『週刊文春』の続報をまち、その証拠が反駁できないほど完全なのをみて隠しきれないとして辞任に追い込まれたのでした。

甘利辞任会見の後、驚くことに世論調査では安倍政権の支持率の上昇がみられたということです。これには、告発者に「畏にはめられた」として非難するといったキャンペーンを流したことが関係しているでしょう。またマスコミの世論調査が本当に国民の意見を反映しているのかという疑念が湧いてきます。実は世論調査を操作することはそれほど難しいことではないでしょう。

しかし甘利事件の本質は、ここだけにあるものではありません。国会議員やその秘書が国やその出資を受ける団体に職務上の行為をあっせん口利きし利益をえるようなら「あっせん利得罪」にあたり、国会議員は辞任しなければなりません。秘書に責任を押しつけて議員に居座ることとは許されません。

さらにこの事件は、甘利氏が口利きをしてURから建設会社に二億二千万円が支払われたという事が問われています。

この事件を整理してみると①ある建設会社が補償問題でURとモメていた。②その建設会社が甘利明に接近した。③甘利の秘書がURに乗り込んで交渉（恫喝）した。④URは建設会社に二億二千万円を支払った、ということでした。

ところが、マスコミの報道は「二億二千万円」をURが建設会社に支払ったことに触れず事件の本質を隠蔽しています。ここにもマスコミが安倍政権に取り込まれてしまつて、政権が受ける打撃をできるだけ少なくすることに協力している姿が浮き彫りになっています。

さらに二月に入り元野球選手の覚醒剤逮捕のニュースが飛び込んできました。これはすでに一年以上前からいつでも逮捕できる状態で内偵が進んでいたのです。それがこのタイミングで逮捕したということに大きな意味があります。つまり国会で甘利事件の追及がなされている間、ワイドショーやテレビのニュース番組は覚醒剤問題に時間をとられ国民の関心をそちらにそらす目的があるので。言い換えると検察庁も安倍政権の援護をしているのです（かつて検察が小沢一郎氏を陥れたということはつとに有名です）。

また甘利報道でマスコミは十年前なら使っただろう「汚職」とか「失脚」という言葉を一切使っていません。このことに素朴な疑問を感じるのは私だけではないでしょう。これもマスコミ各社が本気

になつて安倍政権を追及しようとしていないことを表しているでしょう。こういうマスコミの姿勢は、本欄でもすでに幾度も指摘していますが、日本のマスコミが安倍政権に取り込まれて墮落してしまつていことを端的に示しています。

折しも国会で安倍首相が言論弾圧をしているのではないかという野党の追及に対して、安倍氏は「日刊ゲンダイ（販売りとウェブを中心とする日刊紙。安倍批判を展開している。ネットで無料でも読める）があるんだから報道の自由は守られている」とはからずも答弁しました。日本の報道の自由は「日刊ゲンダイ」によつて守られていると総理大臣が国会で答弁したわけです。これある意味歴史に残る答弁ですが、逆を考えればNHK・民放各局・大手新聞社はもう安倍政権に打撃をあたえるような批判をしないと安倍自身が認識をしている、ということになります。これらのマスコミ各社はジャーナリズムとして恥を知らねばなりません。今後甘利汚職事件の立件が行われなければなりません。これがどう追及されていくのか、彼を主要閣僚としていた安倍首相の責任の追及が正しくされるかを我々国民は監視をしていく必要があります。

### TPP「署名式」

二月四日にニュージーランドでTPPの「署名式」なるものが行われました。

TPPは国家の主権をさまざまな形で奪う不平等な条約であることを国民にひたすら隠し続けて、各国の政府は欺瞞の「大筋合意」をとりつけたのでした。TPPは単に関税だけでなく、日本の制度の隅々まで変えてしまうほどの大がかりなものです。

さらに「関税自主権」を我が国から奪い、医療・金融・公共調達などのサービス分野から「投資」の自由化までも含む幅広い主権を喪失させる内容をもっています。TPPが批准されれば、国民の生活や財産を守る各種の規制など、国内の二百以上の法律を強制的に変更せられると言われています。ぜひとも国民の生活を破壊するTPPの批准を防ぐ必要があります。

そもそもTPPの合意文書は英文で二千ページ以上あり、さらにこのほどニュージーランド政府が発表した付属文書まで入れると五万ページ以上あるということです。しかも日本語の正式文書は存在せず、日本政府からは要旨が翻訳され発表されたにすぎません。つまり国会議員を含めて日本国内にTPPの全貌を把握している人間はほとんどいないというのが実情なのです（条約なのに日本語を公式言語として要求しない政府の態度自体がそもそも国民に対しての裏切り行為です）。このTPPのとりまとめを推進したのが、汚職まみれの甘利明であることは、事態を象徴していると思われれます。

そしてTPPが日本の国と国民をグローバル企業と投資家に売り渡す内容であることが、条文の内容を具体的にとき明かすことで、徐々に明らかにされてきています。

関税について「TPP交渉差し止め・違憲訴訟の会」のメンバーが、テキストに即して分析した結果を発表しました。それによると、政府が「関税を残す」としていた農産・畜産品についても、七年後に再協議し、「関税を撤廃する」を指すという話にすぎないことが明らかになりました。しかもこの「七年後の再協議」が義務付けられたのは、我が国だけなのです。コメや牛肉などの関税は「七年間の猶予」が残されただけなのです。TPPはもともと「例外なき関税撤廃」であり、条文中でも「漸進的に関税を撤廃する」になっているのです。

安倍政権は、TPP暫定合意を受け、聖域五品目の関税維持など自民党の公約に關し「約束はしっかり守ることができた」などと語っていましたが、これほとんどもない大ウソで「関税撤廃時期の先延ばし」をしたに過ぎない。すべての農水産品の関税が撤廃されることになるのです。このことはつまり、日本のすべての農業が壊滅的な打撃をうけてしまうことを意味しています。

またTPPにより日本は明治維新の開国当初の不平等条約以来、再び「関税自主権」を喪失し、同時に「関税撤廃」を強いられることになるのです。

れることになるのです。

しかもTPPには、わが国の国家としての独立性を脅かす内容をもつISD条項、ラチェット条項といった危険なものが含まれているのです。こんな中身の不明なものを国会で批准させては絶対になりません。（本紙一〇二・一〇三号を参照してください）

さらに米国のタフツ大学が衝撃的な試算を発表しました。TPPについて安倍首相は年明けの施政方針演説で「我が国のGDPを十四兆円押し上げ、八十万人も新しい雇用を生み出す」と自慢しましたが、これも大ウソでTPPによって日米のGDPは落ち込み、日本は七万四千人が新たに失業し、米国も四万八千人が路頭に迷うと推定したというのです。TPP合意は先進国にとってもプラスではない。それどころか失業者があふれてしまう。これらのことが明らかにされ米国でもTPPの反対運動が盛り上がりを見せているということなのです。

「投資」の分野では、TPPには「内国民待遇」が定められています。外資に対して自国の投資家に与える待遇より不利でない待遇を与えるというもので、数少ない例外を除いて外資を規制することができなくなるといえるものです。たとえばTPP批准後に、全農（全国農業協同組合）が株式会社化され、その後譲渡制限が緩和されたとき外資による全農買収を防ぐ術はない。外資規制を（TPP締約国に

対しては）かけられないのです。そして外資によって全農が買収されたとき、我が国の食料安全保障は危機に陥ります。つまり食料供給が外資の意志により決められ、国民の主権による安全な食料の供給という安全保障を維持することができなくなってしまう、という事態が予想されます。このほか「最恵国待遇」という条項もあります。

このようにTPPは日本社会を、多数の国民から搾り取りグローバル企業と投資家を儲けさせる仕組みに変えてしまうことになるのです。

### スキーバス事故の背景

この一月に起こった学生十五人の死者を出したスキーバス事故については、バス会社のさまざまな管理の存在が伝えられました。バス運営会社「イーエスピー」には様々な法令違反があった事実が明るみになってきました。

### 事故の背景として「バス事業の規制緩和」があります。

今回のツアーバスなど貸切りバス事業は、二千年までは「免許制」でしたが、この「免許制」が自由な競争を妨げてはいけないという新自由主義の思想が支配しはじめた小泉政権下で批判され、その結果バス事業で「規制緩和」が断行され、「免許制」から「認可制」へと移行した経過があります。この「免許制」と「許可制」の大きな違いは「行政権限の強さ」にあります。免許制なら「免

許を与えない」という形で不適格業者を簡単に排除することがきます。もし規制緩和がされておらず「免許制」が存続していたのなら、今回の様なダメな業者がツアーを組むことはなく、十五人の若い命が失われることもなかったはずなのです。この意味で今回の惨事の背景にバス事業の「規制緩和」があったのです。そしてこのような安全性を犠牲にして儲けに走る「規制緩和」を日本社会のあらゆる側面に徹底していく仕組みを押しつけてくるのが、他ならぬTPPであることを知っていただきたいと思えます。

### 安倍政権が改憲を宣言

安倍首相が新年から繰り返し改憲を口にするようになり、その姿勢はますますヒートアップしています。一月の安倍総理の施政方針演説で、憲法改正をめぐる議論で「正々堂々とし、逃げない」と大威張りで演説しました。その後憲法九条の戦力不保持規定についても変えることを衆院予算委員会で発言しています。

ところが一方で、「緊急事態条項がなぜ必要なのか」「緊急事態条項はナチスドイツの国家授権法と全く一緒だ」などの民主党の質問に安倍首相はまともに議論しようとはせず「政府としてお答えすることは差し控えさせていただきます」と、国会でまともに議論をしようとしません。この逃げは尋常でなく逃げ回って時間稼ぎをしているように見えます。

議論に応じないのは、説明すれば「緊急事態条項」がとつてもなくひどい人権侵害を行いうる危険条項であることが国民に明らかになってしまふからなのです。かつてこれほど危険な改憲案が出てきたことはありません。「緊急事態条項」の危険性については、本欄でも取り上げました。

その問題点についておさらいをしておきましょう。自民党の改憲草案によれば、

- ・国会の事前同意の必要がない。
- ・基本的人権が制限されてしまう。
- ・法律と同じ効果をもつ政令の制定が可能になる。

総理大臣が予算措置を行える。

- ・「緊急事態」に期間の制限がない。
- ・内閣は衆議院の任期を延長することができる。

- ・地方自治がなくなる。
- ・司法も行政に従わざるを得なくなる。
- ・集会・結社・言論・報道の自由が制限される。

ということが可能になるものです。これは要するに戦前の「戒厳令」の復活と言えるもの。内閣総理大臣に独裁権限が与えられ、選挙も実施されず、その期間の制限がないことから、いったん発動した「緊急事態」がその後、延々と恒常化し、独裁体制が永続する道を開くものです。

麻生財務大臣の言った「ナチスの手口に学べ」の発言をそのまま実行するもの。このような内容の「緊急事態条項」を憲法に盛り込むことを、災害時やテロに備

えてという口実で進めようとしているのです。この極めて危険な内容の改憲を、国民にそのひどい内容を隠しながら、具体的に今年の七月に予定される参院選（あるいは衆参同時選挙にする可能性もある）で三分の二の議席を獲得すれば実行してしまおうとしているのです。

安倍政権がこれほど改憲に前のめりになっている背景には、「日本会議」という海外では極右団体として有名な団体がそれを要求していることが上げられます。

安倍政権の閣僚はほとんどこの会員です。野党でも民主党の前原・長島・原口ら、維新の松野らが加盟していると言われて

### 改憲を阻止するために

この安倍・憲法クーデタ政権の企みを打ち破らなければなりません。改憲を許してしまつと、この国が止めどない軍国化へと突き進んでしまうことは、火を見るより明らかです。戦前の軍国日本の社会やナチス下ドイツの社会の再現へと向かうことになってしまいます。

安倍政権は参院選で改憲勢力が参院三分の二の議席を占めて、憲法改定を強行することを狙っています。この危険きわまりない改憲を阻止するため、七月の参院選でこれを止めることが絶対に必要ですが、事態はあまり樂觀できません。参議院の定数は二四二で、三年ごとに半数の一二一議席が改選されます。本年夏の

参院選で改選されない勢力を見ると、自公が七六議席、戦争法賛成の「おおさか」、「こころ」、「元氣」、「改革」が一三議席の合計八九議席。改憲勢力が夏の参院選で七三議席獲得すると合計一六二議席になり、参院三分の二を超えてしまうので

改憲を阻止するためには背水の陣でぞむ必要があります。改憲勢力に参院三分の二を与えないためには、これに反対する政治勢力そして主権者が、連帯して共闘することが必要です。原発・憲法Ⅱ戦争法制・TPP・基地・格差の各問題は、どれも非常に重大な問題ですが、重要なのはこれらの優先順位です。

まずは安倍政権の改憲を阻止することを優先する必要があります。とりわけ重要になるのが、三二ある一人区。自公に対峙する候補者の一本化がどうしても必要です。

共産党、生活の党、社民党はこうした方向で共闘の姿勢をみせていますが、特に民主党が共産党を含む共闘を拒否し続けています。

野党勢力が共闘できなければ、改憲を許してしまうことになるのですが、民主党は自らが、自公の与党の補完勢力に墮落してしまつていることを自覚しているように見えます。自公に対峙することを唱える勢力が共産党を排除するような行動を示しているのは自己矛盾なのです。共産党を含めて大同団結する。そしてま

ずは憲法破壊を絶対に阻止する。この強い決意とこの方向への運動が必要不可欠です。

## アメリカ大統領選挙

日本では昨年、戦争法制反対運動の中からシールズといった若者の運動が起こってききましたが、アメリカも若者を中心にした新しい運動が大統領選挙で展開されてきています。

アメリカでは、二月にはいつて民主・共和両党の大統領候補を選ぶ選挙戦にはいりました。はじめの州アイオワ州では共和党はクルーズとトランプが一位と二位をしめましたが、ともに強硬で排他的な極右・保守派ということです。トランプの暴言の数々は有名になりました。民主党はクリントンとサンダースがほぼ互角の結果になりました。今後民主党の争いはこの二人に焦点が当てられると思われるます。

ここで注目したいのはサンダース候補です。彼は自ら民主社会主義者と名乗っているように、所得格差是正・TPP 反対・公立大学の授業料と学費ローンの無料化・金権政治の廃止などのまっとうな政策を掲げて、若者たちに圧倒的な支持を勝ち取っているということなのです。

米国の国民の状況は中産階級が貧困化してしまつて、1%の富裕層と99%の貧困層に二極分解してしまつていと言われます。そのなかで若者たちも大学を出ても学費ローンに苦しめられ、日本の

若者と同様に貧困に苦しめられている状況にあります。

今後このサンダース候補が米大統領選挙の中でどのような闘いぶりを見せるかを注目していきたいところです。そして貧困や格差に苦しめられている日本の若年層はじめとする国民の中に、この動きに呼応する運動が盛り上がることを期待したいものです。

## 「ライフイズビューティフル」

最後に唐突ですが、ロベルト・ベニーニ監督の名作映画「ライフイズビューティフル」から、イタリアのファシズム政権下での生活の一場面の、忘れられない印象深い会話を掲げます。

校長(女性)：ベルリンではなく田舎。：：小学三年向けの問題なの。『国家医療費が、精神病患者は一日四マルク、身体障害者は四・五マルク、てんかん患者は三・五マルク。一日の平均を四マルクとすると、総患者数が三十万人の場合、彼らを肅正したら、いくらの節約になるか?』

ドーラ：まあひどい。そんな事できやしないわ！

校長：私もそう思ったわ。できやしないって。七歳の子供には難しすぎるでしょう。複雑な計算があるわ。比例や割合といった最小限の代数の知識が必要だわ。イタリアなら中学生向けの問題。

ロドルフォ：いや、かけ算だけで十分だ。患者が三十万人だったら、四マルク×三十万人だ。全員を殺せば、百二十万マルクの節約になる。簡単だ。

校長：正解。お見事よ。でもあなたは大人だわ。ドイツでは七歳の子供に出題するのよ。民族がちがうわ。：：：こんな会話が交わされる社会に、この日本をさせないために、今できることをしていきたいと思うのです。

そのために我々庶民ができることは限られています。そこで提案です。

◆この「芥川だより」を周囲の方々にも勧めていただきたいこと。(ネットで無料で読めます。「芥川だより」で検索すれば出てくる) 残念ながらマスコミ報道だけでは、本文でも述べましたがこの国に進行している状況に気づくことができせん。おすすめは、「日刊ゲンダイ」、「しんぶん赤旗」、「植草一秀氏のブログ」などです(いずれもネットで無料です。本紙一〇四号の本欄の最後にもおすすめがあります)。

◆絵がかりの「戦争法の廃止を求める二〇〇〇万人統一署名」に協力していただく。

◆我々が提唱するネット署名「反安倍・改憲阻止の統一候補ファンクラブ」

(「反安倍・反戦争法制の統一候補ファンクラブ」を改称しました)に賛同をしていただく。

とにかく、少しでも多くの方々にこの国の危機を知っていただき、戦争へ・独裁国家へ突き進む安倍政権を一刻も早く政権から追い落とすため、力をあわせましょう!

## 哲学者のつぶやき(19)

### 安全法制を哲学する

祖蔵 哲

今月は久しぶりに哲学者が政治について語ろうを思います。歴史上も多くの哲学者が政治について語ってきました。哲学には政治哲学という分野があり古代ギリシャではアリストテレスが「政治学」という八巻に及ぶ書物を残しています。それには、最高善に基づく国家、家族共同体、政治制度、法律などの記述があり、政治は善や徳に基づいて行われるべきものであると言われています。歴史的にはローマ時代、ルネサンス期そして近代においても多くの哲学者が政治について語っていますが、どうもその評判は良くありません。近年ではナチスの擁護者として問題になっているハイデガーや我が国でも太平洋戦争の賛美者としての西田幾多郎など、時代を哲学的に分析することが為政者に利用され、また本人自身もそれに結果的に加担してしまうといったケースが非常に多いのです。

さて、現代の日本の政治状況をみると最大のテーマは去年の九月に成立した平和安全法制です。これは「自衛隊法等の一部を改正する法律」「平和安全法制整備法」と「諸外国の軍隊等に対する協力支援活動等に関する法律」(国際平和支援法)の総称です。マスメディア等からは安保法制、また反対勢力からは戦争法案

とも呼ばれています。法律の名称自体にどちらも平和という名称をつけているために、いや平和じゃない戦争をするための法案だといって反対勢力は抵抗しましたが、そもそもそれ以前に安全保障という名称からして武力行使を前提とする安全状態の確保を目指しているのです。武器を持たない平和使節団が敵国などに行き交渉するなどといったソフトな法律ではありません。この法律は皆さんよくご存知のように日本の自衛隊が「集団的自衛権」を根拠に広く世界の紛争に関わることを可能にするものです。ご存知のように自衛権には「個別的自衛権」と「集団的自衛権」があり、前者は自然法的に後者は国連などの承認後に成立するという見方があります。いずれにせよ、自分の安全を守るためにはまず相手を攻撃しなければならぬという、動物的自然状態が人間の社会の考え方の原理となっています。これが世界の「普通の国」であります。これが普通というのを多数決と考えるとはそれはそうでしょう。しかし、もう少し俯瞰的に考えてみて、これが本当に普通なのかどうか。現在の世界の紛争や戦争の過程で、相手を即攻撃するというのは本能的と解釈すれば感情的、感性的というものになるのでしょうか、待てよ、よく考えてから、というのは頭を冷やして冷静になって、理性的なのでしょうか。このように実際の戦争状態になるのは感性的なものか、理性的なもの

か哲学的に考えてみましょう。

哲学は人間の思考の原理を問います。その思考の原理のひとつに「理性」と言われるものがあります。理性に対する言葉は感性的です。簡単に言えば、理性は深く考えること、これに対して感性は直観的に閃くことといってもいいです。ではどちらが優れているのでしょうか。そうです、皆さん理性の方だと思いますよね。よく、理性的に考えて、などというときはじっくりと正しく考えてと言うことを意味します。しかし、この理性優位の考えは歴史的には最近の傾向なのです。最近といってもギリシャ以来のことですが、それまでは感性が優位とされてきました。深く考えることと、それは真実ではなくなるということとです。直観優位です。時間が経てば事実から段々と遠のく、これが以前の考え方であったのです。古代社会の政治の決定は多く信託によって行われていました。西欧でも日本を含むアジアでも、これが感性優位の証拠です。さて、これがどう政治とかかわるのでしょうか。

政治とは人間の思考によってなされるものです。政治を思考の結果として捉え、政治を変えるにはその思考過程の変更をしなければならぬといった恐らく唯一の哲学者はカントです。カントについては以前にもお話ししましたが、ドイツが分裂状態の北方プロイセンに一七二四年に生まれました。一七八九年にフランス革命が起こり、フランスは絶対王政から共和制の国へと移行しヨーロッパは混乱期にあったのです。それ以前十七世紀前半期もヨーロッパ全土を巻き込んだ宗教戦争である三十年戦争により常に国家自体が戦争の危機の状態の連続でありました。その中でカントは『永遠平和のために』という書物を著しました。このカントの論文は第一次世界大戦後の国際連盟設立や現在の欧州連合の基本的理念を作ったといわれています。すこし長くりますがその概略を説明します。

（1）国家を人格として捉える…国家をひとつの人格として捉える。人間の場合もそうだが、人格はそれ自体が目的であって、誰かに所有されることがあってはならない。それで国家が国家を併合することがあってはならない。

（2）自然状態は戦争状態…自然状態は戦争状態だ。それで平和状態は作られ、制度の下で保障されなければならない。

（3）共和制…永遠平和状態を目指すには最適な制度。なぜなら共和制では人びとが共同の立法に自由に従うから。強制されず、自由に従うことが重要。自由が道徳を目標ける理性の要請のひとつである。

（4）平和連合を作る…国家を人格と見なすと、そこには二つの側面があることが分かる。傾向性（欲求）と道徳法則を自分に課す理性、国家はこの二つの要素のバランスの上に立っている。国家は傾向性に流されて対外的な利益を求め、戦争によって互いに害を及ぼしあっている。一般的には戦争を終了させるために関係国間の平和条約が結ばれるが、永遠平和状態の観点からすれば平和条約では足りない。なぜなら平和条約は一時の争いを調停するだけであって、根本にある動因そのものを解決するものではないからだ。そこで私は、平和条約の代わりに、平和連合を作れることを提案したい。国家には、欲求に流されるだけでなく、自分に道徳法則を課す能力ももっている。国家は永遠平和状態を目指すことを義務と見なす。その為に国家は相互の契約に基づき、平和連合を作るべきだ。

（5）世界共和国と世界市民法の理念…平和連合は次善の策。理想は世界共和国。これは戦争が起こる余地のない国家。ただいきなり世界共和国と言ってもムダなので、とりあえずは平和連合を目指すようにするのがいいだろう。また、永遠平和状態のためには、国内法や国際法に加えて、世界市民法の理念が必要となる。これによって人びとは、自分たちが永遠平和状態に近づいていると実感することができる。

（6）いつか達成されることが保障されている…これは摂理…永遠平和状態の達成は、現在ではないとしても、いつか必ず達成されていることが保障されているからだ。それは何によってか。自然の摂理によってだ。自然は国家に傾

向性をもたせた。しかしこれは合目的なものだ。どうということかという、国家が傾向性のもとで戦争状態にあることよって、むしろ逆に国家同士を結合するように向かわせている。戦争によって平和状態が促進されるのだ。このように、摂理による保証は永遠平和状態へと目指すよう私たちに義務づけている。現実世界で本当に達成されるかどうかは確かではないけど、これは道徳的な観点からは確かに意義をもつのだ。実現できるかどうかについては心配しなくていい！とにかく永遠平和状態を目指して努力すべし。カントは永遠平和状態を理念と見なして、そこに向かうことが国家の義務である。

以上が概略です。まあ、一度読んで下さい。素晴らしいではありませんか。よくこのような論を二百年以上に展開してきたものです。そもそもカントの思想は先ほども言いましたが人間の思考過程の理性そのものに限界があるということをも有名『純粋理性批判』のなかで述べました。つまり、近代になっても依然として人間は理性によって世界の全てを知ることができると信じていたのです。自然科学を代表とする学問は理性を駆使し、世界物質の原理を発見しその応用で人類を幸福に導いてきた。

しかし、一方で戦争や飢餓、不幸は無くならない。これはどうしてなのか、と言うことを真面目に考えたのがカントです。『純粋理性批判』は非常に難解なのです

が一言で要点が理解できる有名な言葉があります。「コペルニクス的転回」です。これも以前お話ししました。物を人間が認識する場合、以前の考え方は、物から人間の感覚器官に刺激が入りそれを解釈するというものでした。カントは、それは逆で人間の感覚が物を認識するのだとしました。これはどういうことを意味するのかというと、物を認識する能力は人間の本性能力の限界に制限されるということ。つまり、どんなに理性を働かせても物の本質の理解はできないということを証明したものです。ではこれがどうこの「永遠平和のために」の考えと結びつくのでしょうか。

簡単にいうと、政治の世界でも、戦争もなくし平和を築くためにいろいろ考えても限界がありますよ、法律を作ったり約束事を決めてもそれはうまくいきませんよ。なぜなら人間の理性で考えることには限界があるからというのです。ではどのようにすればいいのか。その回答がこれもまた難しくなりますがカントの批判三部作の二番目『実践理性批判』にあります。

『実践理性批判』のテーマは、真善美のうちの「善」です。カントは本書で道徳をいかに規定できるかという問題に取り組みます。カントの道徳論の大きな特徴は、ただ理性の推論にしたがって何が道徳(実践)的であるかを規定するところにあります。

カントは、人間の理性から直接導かれる道徳があるはずだ、という確信からスタートします。そして、道徳の本質は快や欲望といった目的ではなく、形式のうちにあるとします。道徳は形式という硬いもの、何か強制的、不自然なものといったイメージがありますが、カントの道徳とはそのような感覚的なものではありません。

なぜ道徳の本質を快や欲望に求めることができないのか？それについてカントは次のように主張します。快や欲望は経験的なものであり、意志を経験に先立って規定する法則とはなりえない。それらを土台とした行為は、自愛や自分の幸福に基づいている。しかし何を幸福と見なすかについては、各人で異なる可能性がある。それゆえ幸福の原理を道徳法則とみなすことはできないと言っています。およそ実質的な実践的原理は、がんらい実質的なものとして、すべて同一種類に属し、自愛あるいは自分の幸福という普遍的原理のもとに総括されます。

たとえば、電車のイスに座っていると、目の前にお年寄りがやって来て、「疲れていてかわいそう、イスを譲ってあげたい」と思ってイスを譲ることは、カントからすれば道徳的ではない。それはイスを譲ってあげること満足を得たいという気持ちに流された行為であり、エゴイズムの現われにすぎないことになるからです。ええー、普通に私たちこのよ

うに思いますよね。エゴイストですか、あんまりですよ。カントはさらにこのようなことも言っています。誤って、犯罪を犯した友人が助けを求めてきたので貴方は自宅に匿った、その時警察が捜査に来たときどうするか。カントに言わせると警察に引き渡すべきであるという。どうしてこのようになるのか。この一見不可解なカントの道徳観念が、国家間の紛争抑止を考えるヒントとなるのです。カントが考えたこの道徳概念は「格律」と呼ばれ、真の平和法、普遍的立法創造の基本的考えです。

今回は難解なカントの書物を紹介しさらに頭が混乱したとおもいますが要点だけ理解下さい。現代はおおよそ政治に哲学は無縁だと思われ、現実になんか勉強している政治家は皆無です。立法者も反対勢力も同じです。しかし、本物の政治には哲学が必要です。現在の世界のあり方が善を目指しているものかどうかは哲学的に考える必要があります。

次回はこの不可解なカントの思想がどのように平和な世界を作るのかを哲学的に考えていきたいと思います。



梵店主

死線をこえる三途の川を越えられず引き返したよっちゃんは、特にうれしい気持ちになつたわけではなかった。入院した時に、もう生きて娑婆には出られないと観念していたからである。その覚悟は、

退院が近づいても一向に変わらなかつた。いちど奈落の底にたたき落とされ絶望の淵を味わつたら、そう簡単にもとのようにはなれない。心の底にへばりついたように病への疑念が住み着いてしまうからである。不発爆弾のような病根がいつどこで爆発するかもしれないという疑いが、浮かれて喜びたい気持ちを消してしまつていた。

よっちゃんは、これまで死に対する恐れや苦痛、あの世の地獄・極楽などを多くの人から教えられてきたが、実際に死の淵に近づいてみると、それらの教えとは大きく違つていた。そんなものは無いと確信したのである。心の弱さが生み出した幻想であると思つた。

毎夜、寝られずに一時間ごとにトイレに行つたり、背筋の神経がベッドで刺激を受けて痛んだり、とにかく嫌になるようなことばかりであるが、気持ちを強く持ち、それらの障害をじっくり味わつてやれ、という気概を持てば、別にどうということはない。

死に対する恐怖も同じで、「死にゆくドラ

マを楽しんでやろう、死んでやる！」

これくらい根性を持てば様々な恐怖心は消える。逃げたい、避けたい気持ちが死への恐怖心をあおり立てるのである。

いくら立派な坊さんの説教を受けようが、経典を読もうが、何とかして避けたいという気持ちがあれば、恐怖心は無くなる。ない。

逆に無学であつても、開き直りができれば何も恐れるものなど無くなる。

この覚悟が一番大事なことであると、よっちゃんは考えたのである。死への恐怖心や苦痛は人が作つた幻想である。いや、弱い心が招く泥沼のように抜け出せない迷路である。

人は生まれた以上、死ぬのは当たり前で何も特別なものではない。その当たり前前

のことに、特段の恐怖心や苦痛を伴うはずはない、とよっちゃんは考えた。

病は気から、気持ちの持ちようである。もなるのである。困つたときには、都合のよい開き直りである。自分で考える都合のよい独断でいいのである。人に教

えてもらふのではない、自分で考えるのである。いくら本を読み探し求めてもなかなか得心の得られる回答は見つからない。人は、それぞれ違つた環境下で生きている。自分と同じ状況で生きている人はいない。たとえ家族や兄弟であつても、その状況はちがう。

人生は何も人のために生きているのではない。自分の人生なのだ。他人が何と

言おうが、そんなものはどうでもいい。

自分が納得できればいいのである。要するに自己満足できればいいだけである

この自己満足は人それぞれ違ふから、生き方も違つてくる。

よっちゃんの考え方がみんなと違つていても当たり前だし、当然といえば当然である。

みんなと同じでないと困るという考え方が、人を不幸にさせる。誰彼がどうこう言つた、どうこうしたなどと気を使うことなど無用だ。そんなことに気を使ひすぎるから心が弱くなるのである。

自分の心が弱くならないように、日々鍛えなければ、すぐになえて、とんでもない恐怖心や猜疑心が頭をもたげてくる。

自分の心を見続ける。少しでもなえそうになつたら、厳しくたたき、生きていることの有難さを想い、死への恐怖心を追いやり、いつでも死に行く覚悟を持続させる。

これが、よっちゃんが考えた病への作戦だつた。これは、あくまでよっちゃんの考えで、みなさんに当てはまるかはわからない。

退院が近づいてきても、よっちゃんの体調は少しもよくなつていないとは感じられなかつた。ステロイドの量は30ミリ。ステロイドの副作用は依然として強かつた。

顔や胸には赤い斑点ができていたし、顔もアンパンマンのように丸く膨れていた。

一番気になつたのが、目の充血である。

また、足が細くなり、胴体だけが固く太くなつた様子は、どうみても病の深刻さが増してきて寿命が早晩尽きるだろうと思えた。

見舞客の反応も、口には出さないが「もう永くないやろうなあ…、元氣そうに口だけは言つておるが」という反応が感じられた。

よっちゃんも、退院は病院の都合であつて、病状が回復したからだとは、とても思えなかつた。よほどのことがない限り入院は三ヶ月というのを、聞いていたからである。四ヶ月の入院はかなり例外的な患者である。そんなわけで、もうどうしても退院は避けられないのである。

よっちゃんは、機会あるたびに、回診に来る教授に、長く居れるようお願いしてはいたが、いつまでもはいられない。寒い冬が迫つてきている十一月の風は、よっちゃんの神経を刺激し、不安を膨らませる。



どうして私の友だちは

みんな変なんだろう?…の巻

私の仕事は、毎月、忙しい時期とそれほどでもないときがあつて、忙しい時は徹夜もする。そういう忙しさがピークだった日に、友だちのM子からメールが来た。「突然ですが、今、ネットを見ていたら、信長の新しいことがわかりました。手があいたときに電話を下さいませ」。もちろん、速攻、返信する。「すみません、いま、ムリ。また今度、教えて下さい」。しかし、気になる。信長の新しいことって? 突然、信長。ピンポイント歴女となつて二年。知れば知るほど「この人、武士としてどうなん? 人間としてどうなん? ひよっとして、ヒットラー以上にえげつない虐殺者と違うん?。ヒットラーは少なくとも自国民を殺してない:でも信長様は…」と、平成の御世に生まれ、命のやり取りを想像もできない私はファンであることにすら弱気になる。だが、惚れた弱み、老いらくの恋のお相手なので、「信長」と言われると、ピピッと反応してしまう。

と作家たちが空想の翼を広げ、私ぐらい信長通になると(エヘン!)、「長男・信忠犯人説」まで読んだことがあるゾ(別に威張ることではないが)。落胆を隠せない私に、M子は「これは、説やないねん。根拠があるねん」。

すぐく長い話だったので、要約すると、信長の織田家はもともと徳島の出身で、そもそも天皇家の血筋だった(ほんまかいな!)。だけど、二派の争いになり、信長は破れた側の子孫。だから、ときの朝廷を滅ぼして自分が天皇になろうとした。しかし、信長が天皇になつたら戦争をふっかけてこないとも限らないと考えたイエズス会の「えらいさん」が「そうならんうちに殺すよう」命じた、というわけ。光秀に? ありえん。

それに、既に小説になつていそうなストーリー展開だと思つけど、M子は信じ切つているようで、矛盾点をつくつと「まあ信長は、どうでもええやん。問題は、いまも、天皇家が二つあつて、争つていることやね」と話の流れを、いつものところに持つて行く。何でだか知らないが、M子は地球の中心は日本で、その中心が天皇家で、外国の王族とは格が違う、と自慢(?)する。「あんた、何を根拠に。そりや、皇族やねんから、特別な人たちやろうけど」。「そういう意味じゃなくて。宇宙人が交信してるのは、日本の天皇様だけやねん。しかも、交信ができる天皇は、いまの天皇陛下やなくて、下鴨神社におる、別の天皇家の方の人やねん」。はあ? いつものことながら、この会話にはついていけない。

M子、頭、大丈夫? 私はネットつて

ほとんど見ないので、わからないが、こんな話をまことしやかに流しまくっているのか? 天皇家、というより宮内庁の人たちに怒られるんじゃないのか? そもそも、どうしてそんな荒唐無稽な話を信じるんだろう?

M子は、いたつて元気な大阪人で、旦那さんを尻に敷き、息子と娘を大事に育て、育児の手が離れたところからパートの仕事に勤しみ、今ではランクが上の(つまり時給が高い)パートタイマーである。娘や友だちと旅行を楽しみ、おいしいものを食べるのが好きで、料理もうまい。細い体のどこにそんなエネルギーが詰まつているんだろう、と感心するぐらい精神的な奥さんである。その心身ともに健全な奥さんのアンテナに引かかった「特別な情報網」がネットの世界にあるらしい。

いつごろから、そのネットのとりこになつたのか定かではないが、しきりに「世界を牛耳っているのはいまもロックフェラー家なんやてね。あの人がだけが金持ちになるように、金融市場を好きなように動かしているやて」とか、「シャーロット王女はキャサリン妃の生んだ子やないらしい」などなど、そのネットの情報をタレ流す。ロックフェラーの方は「ああ、そうなん」としか思わないが、シャーロットちゃんの方はバカバカしいにも程がある。「アンタ、そんな話、信じてんのん?」と嫌悪感満載で言うつと、やつきになつて反論する。「病院の前でマスクミに話してる姿、テレビでやってたやん。生んだ次の日に、あんなに元気に高い靴履いて、赤ちゃんを抱くと思う?」いや、

抱くやろう。母なんだから。高い靴も履く。すぐにお車に乗り込むんだから。我が日本国のプリンセス愛子様についてはもつとヒドイ。ごめんね、皇太子様、稚子様。宮内庁の皆様。認知症の一症例だと思つて聞き流して下さいよ。

M子は言うのだ。「愛子様は3人いてる」と。もちろん、2人はクローン愛子様なんだそうである。Aの愛子様が正真正銘、稚子様が生んだ愛子様。こんなことを書いて、罪にならないかと心配だが、愛子様は皇太子の精子と稚子様の卵子で体外受精されたお子様で、この同じ受精卵でもう二人の愛子様が(別の健康な二人の女性のお腹で)育まれ、Bの愛子様とCの愛子様が生まれた。Aの愛子様に何かあつたとき、BとCの愛子様が助けをするのだ。Aの愛子様はお姫様だけあつて、ちよつとぼんやりしているの、チェロを弾いたりしているのは、実は関連なBの愛子様。Cの愛子様はもしAの愛子様が病気になるつて、たとえば肝臓に障害があつたりした場合、提供する役なんだとか。きやー。怖すぎ。これでは、ホラーではないか。

「違うねん。天皇家はそれぐらい人類として重要で、血脈を途切れさせるわけにはいかへんから、先端的な技術を駆使してるわけ。宇宙ではクローンなんて当たり前やし」。天皇家を敬愛してんだか、貶めているんだか。そもそも人類の頂点の天皇様がいる日本が何で先の大戦であるなことになつたのだ。M子よ、いつべん病院に行つて。それから、そのネットはもう見ないで。頼むから。

## どんな日本に誰がする

坂本 一光

主権者の声が政治を変える年が始まった。それはまだ予感であるが政治は変わるだろう。政治を変える流れを止めることはあのアベさんにもできないだろうと思う。こんな予感がするのは初めてである。

予想はしたが予感はなかったことに話を飛ばすと、『プラハの春』がソ連邦を頭とするワルシャワ条約機構軍に弾圧されたのは一九六八年、私が大学二年のときだった。ソ連邦の東欧支配のほころびはその後も続き、八〇年代に入ると、ポーランドの自主管理労組『連帯』の運動の高まりなどをとおして東欧の変動の兆しは誰の目にも明らかであった。しかし、今振り返ると、それから十年を経ずして変動が激動となり、東欧諸国すべての国家体制が一晩で一変し、挙句の果てにソ連邦が崩壊するとは予想もしなかった。いつかは変わるだろうとは思ったはずだが、それは予感ではなかった。彼の地の深層で起きている変化に対する情報が必ずしも十分でなかったこと、また外国のことであり自らが当事者でないこと等が予感に結びつかなかった原因とさえは当たらずとも遠くならず、か。しかし決定的には、ソ連邦の支配下で進行していた深層変化に対する想像力の欠如があった。

それにしても、国家といえども一晩でひっくり返る。自然も社会も不変不動に固定されておらず、万物は常に変動し運動し一瞬たりとも静止することはない。自然の教訓であり、歴史の教訓である。同様のことは、一九七五年四月のサイゴン陥落に際しても(テレビ画面をとおしてであるが)見たとおりである。大国といえども小国を思いどおりに支配することはできず、かいらい政権は倒れ米国は逃げ帰った。

国家が一晩でひっくり返る。考えてみれば、それは日本にも何度もあったことである。一世紀半前の明治維新では、二六〇年もの間変わるはずがないと思われ続けたに違いない江戸幕府が倒れた。もっと近くでは一九四五年に、大日本帝国がポツダム宣言を受諾して降伏、翌年には大日本帝国憲法は日本国憲法に変わった。天皇主権の国は国民主権の国になった。陸海空軍その他の戦力はこれを保持しない国となった。

そういう節目ごとに、人間は、世の中に変わらないものはないと痛感する。しかし同時に、歴史に翻弄され続けて来た弱い人間のDNAに刷り込まれているわけでもないだろうが、『すべてが変わるよーに見えても、実は何も変わらないと彼は信じていた』というボードレールの言葉に似た感情が胸をかすめる(この言葉は、加藤周一の評論『教科書検閲の病理』(一九八二年)、に引用されていた)。そ

うなれば、弱い人間は心ならずも沈黙の日常に埋没するほかなくなる。ついでに言えば、心ならずも人間の弱さかもしれないが非難されるべきことでもない。勇敢で強いことが必ずしも善でないのは臆病で弱いことが必ずしも悪でないのと同じだからである。

今度はどうか。主権者である国民は沈黙の日常に埋没するのか。今度とは、二〇一四年七月の集団的自衛権行使容認の安倍内閣閣議決定から、二〇一五年九月十九日の参議院における戦争法強行に象徴される安倍内閣の暴走を前にしての今度である。今度は違うと私は思う。主権者の声が政治を変える年が始まる予感しきりである。予感が生み出されるのは、戦争法をめぐる多くの国民の主権者としての意識の目覚めを目の当たりにしたからである。

主権者としての自覚を思うとき、再び話は飛ぶが、私は2002 FIFA World Cup Korea/Japan に出場したドイツのゴール・キーパー、オリバー・カーンのことを思い出す。夜遅く宿舎に戻り居間に立ったままテレビを点けると、ブラジルとの決勝戦を前にしたカーンがインタビューに答えていた。

「ブラジルは最高のチームだ。一〇〇%の力を出しても足りないだろう。生涯最高のプレーが必要だ」とカーンは言った。こいつは自分を超えようとしている、私がそう思ったのと同時だった。「自分の力

を超えようと思うんだ」、彼の言葉が続いた。私は鳥肌が立つのを覚えた。

カーンは敗れた。しかしカーンは人間の偉大さを語りそれを示した。カーンが語るのをテレビニュースで見、六月三十日の決勝戦をラジオで聴きながら、私は感動し、その頃サッカー狂症候群につける薬はないという警告にもかかわらず、つい、Footballitis (フットボライティス)に感染してしまった。

人間の偉大さとは何だろうか。人間が偉大であるのは、人間は、時代や社会として自分自身でさえも、それを超えようとしてはじめて見えてくる何ものかであることを知っているからだ、と思う。超えたかどうかは別のことである。

そう考えると、戦争法を許さない、と心ならずもの日常埋没から顔を上げた人びとはみな、自分を超えようとしたのだと思う。かくも偉大な覚醒を再び眠らせることははや不可能である。

どんな日本に誰がする。主権者の声が日本の政治を変える。新しい自由主権者運動が始まっている。

(かたちは心であり、心はかたちになる ■大分の素老人)



今回は皆さんもよくご存じの話です。

芥川龍之介の「藪の中」、黒澤明の映画「羅生門」の原話です。黒澤映画の、山中の鮮烈な木漏れ日のイメージが印象に残っています。教科書に出ない度は、四／五。

妻と丹波の国に行く男 大江山で縛られる話 (巻二九ノ三)

今は昔、京に住む男、その妻が丹波の国のものであったので、妻を連れて丹波の国に連れて行っていった。妻を馬に乗せ、自らは竹の籠かご (矢の入れ物) に矢を十本ばかり差したのを背負い、弓を手にもって馬の後を歩いていったが、大江山のふもとで刀を差しただけの大層強そうな若い男と道連れになった。

成り行きで連れだつて行つたが、互いに世間話などをしていりうち、「お主はどこまで」などの会話をしているうち、道連れを差した男は「拙者が差しているこの太刀は、陸奥むちの 伝来の逸物。これを「覧なされ」と、その刀を抜いて見せると、言葉に違わず素晴らしい刀だった。男、これを一目見てすっかりほれ込んで、我が物にしたいと渴望した。この気配を見透かして若い男は「もしお主がこの太刀をお望みならば、お主の持つその弓と交換してもよいが」と言う。男の持つ弓はそれほどの逸品ではなく、それに較べこの太刀は実に素晴らしい逸物だったので男はその太刀欲しさ「大した得になる」

と考へ、一も一もなく交換したのだつた。

さて、そのままに進んでいくと、若い男「拙者が弓だけで矢を持たずにいるのは、人目に見てもおかしい。山に行く間、その矢を二筋ほど貸してください。お主にとつてもこうして伴をしていくのだから同じことでしょう。」と言う。男これを聞き「それもそうだ」と納得し、逸品の太刀を手に入れて喜ぶにまかせ、矢を二筋与えた。こうして、若い男は弓を持ち、矢を二筋、直接手に持ち後からついていく形になった。男は竹の籠だけを背負つて太刀を腰につけて進んでいった。

\* \* \*

こうする内に、昼飯を食べようと藪の中に入つていった。若い男が「人目につくところは見苦しいので、もう少し奥に入りましょう」と言つたので、藪の奥に進んでいった。ほどよいところに来て、女を馬から抱き降ろしたりしていると、この若い男、突然弓に矢を番えて男に狙いを定め、弓を引き「動く射殺すぞ」と叫ぶ。男、不意をつかれて茫然と立ち尽くしている。「山の奥へ入れ」と脅す。男は命惜しさに妻を連れて七八百メートルばかり山の奥に入つていった。そこで若い男が「太刀と脇差を取つて投げろ」と命令するままに、皆投げ捨てて立ち尽くしているのを、ねじ伏せて馬の縄を使って木に堅く縛りつけた。

こうして若い男、女に近寄りよく見ると、女は二十歳ばかりで身分は低いものなかなかな愛嬌があり魅力的であった。若い男、この女にすっかり心を奪われ夢

中になり、女の着物を解こうとする。女も拒否することもできず、言われるままに着物を解いた。すると男も自分の着物を脱ぎ、女を掻き抱いて二人で伏した。

女はどうしようもなく、男のいうままに従つたのだが、本の男は木に縛りつけられ一部始終を見ていただろうと考えると、その心中はいかばかりだつただろうか。

\* \* \*

その後、若い男は起き上がり、元どおり着物を着て、竹籠を背負い、太刀を取つて腰につけ、弓を持ち、その馬によじ上つて女に言う。「気の毒とは思ふが、外に仕様もないので俺は行く。お前に免じてその男は殺さず許してやる。馬はいただいておくぞ。」と言つて、全速力で逃げた。その男の行方は、杳として知れなかった。

その後、女は夫の縄を解き放つたが、男は茫然とした顔付きをしていたので、女「何とあんたさんは情けななおすなあ。こんなんではこれから、ろくなことにならへんわ」と吐き捨てるように言う。男は言葉もなく、そのまま妻を連れて丹波に向かったのだつた。

\* \* \*

女の着物を奪いとらなかつた若い男の心ばえは、なかなか立派である(当時女の着物は、盗賊の絶好の標的だった)。元の男の心は、情けない。山の中で見知らぬ男に弓矢を与えてしまったことは、まことに愚かな行為だ。この犯人の男はその後も行方知らずのままに終わったということだ。

《終わり》

《コメント》

この話は、芥川龍之介の『藪の中』で取り上げられ、さらにはそれをもとにした黒沢明の有名な映画『羅生門』の題材になったのでした。『今昔物語』の中でも屈指の有名な物語と言えます。しかし芥川の物語には、「真実は藪の中」という近代的な懷疑主義的な解釈と、黒沢明の映画には、ヒューマニズムの味付けがなされておき、物語としての面白さを若干そがれているという感を免れないと、私は感じます。その点この『今昔物語』の原話は、素朴なままの形で語られているのが、かえって好ましいと思うのです。黒沢の映画の魅力の多くは、山の中の木々を漏れる瑞々しい光の映像にあるのではないのでしょうか。

この話のあと、この夫婦はどうなるのだろうか、という疑問が当然湧いてきます。私の想像するところでは、このまま破局を迎えるようなことはなく、外見には何事もなかつたように生活を送るのではないのでしょうか。ただこれから力関係が大きく変わり、夫は一生妻に対して頭が上がりないという状況が続く、何かことあるごとに、妻からはこの事件を思いださせるようなことをほめかされて鼻白むということになるのではないのでしょうか。

記者の最後のコメントで、女の着物を取らなかつた若い男をむしろ褒め、夫をけなしているのは、例によって大變興味が湧きます。

二〇一五年十一月二日(月) K神社にてお宮参り。女の神主さんにお祓いをしてもらう。そして、写真屋さんで記念写真を撮る。赤ちゃんの写真を撮るのは大変である。なかなか希望するポーズをとってくれないから。ようやく写真撮影を終えて、抱かせてもらうと、前回より重くなっていた。

十一月三十日(月)よく寝ている。昔から「寝る子は育つ」という。帰り際に抱かせてもらうと、また重たくなっていた。髪の毛が増えて、より人間らしくなってきた。

まだ昼と夜の区別はついていない。昼夜の区別が付き、生活のリズムが確立するのは通常生後四か月頃だという。歩き出し、話し出すのは一歳半ごろだという。光君とお話ができるのはまだまだ先のことである。

地球カレンダーというのがある。地球誕生から現在までの四六億年の歴史を一年三百六十五日のカレンダーで表したものだ。四十六億年前の一月一日午前〇時に地球が誕生したとすると、原始生命の誕生は三十九億年前の二月二十五日、最古の哺乳類の登場は三億年前の十二月十三日、直立二歩行する猿人の登場は約七〇〇万年前の十二月三十一日午前一〇時四〇分、火や言葉を使用する原人の登場

は約一八〇万年前の十二月三十一日午後八時三十五分、今の人類の直接の祖先となる現生人類(ホモ・サピエンス、新人)の誕生は二〇万年前の十二月三十一日午後十一時三十七分、資本主義が始まる産業革命は約二五〇年前の十二月三十一日午後十一時五十九分五十八秒のことになる。

直立二歩歩行により、手が自由になり道具が使える、思考できる重たい頭を支え、人間としての発達が可能になったのも、話し始めたのも大晦日のことなのだ。まして、利潤追求や株式投資は除夜の鐘を聞きながら始まったのだ。

受精から誕生まで十月十日(とつきとおか)といわれる。十一月三〇日の一年前には光君はこの世に影も形もない「無」であった。地球カレンダーで大晦日にならないと人類は誕生しなかったように。歩き出し、話し出すまでには赤ちゃんの誕生にも人類の誕生にも長〜い、長〜い歴史があるのだ。

人間の誕生と人類の誕生を重ね合わせると、「時は金なり」とあくせくするのがばからしくなってくる。また、原爆や原発で地球をこわして良いのだろうか。

会社を辞めることを決めた、と申す言葉にM井の決意の固さを改めて感じた。明石は「辞めて、何するんや?」と尋ねると「故郷に帰り、親父の仕事を手伝うんじや。」

結婚もそれを前提に決めたので。殊、結婚は、エラそうなことは言えんがのう、どちらかと言うと相手に決めてもらうたんなやが?ワツハツハー」と辞めることになった理由を、冗談交じりで話した。

「今更、俺が何を言おうと、もう辞めると君が決めたことなので、引き留めるための言葉を幾ら尽くしても無駄やなあ。辞めようと思つた切っ掛けは、何かあつたんか?」と問うたら、「転勤の話が内々にあつたのが、直接の切っ掛けになつたんやが。まあ、数年前からそろそろ帰つて来て、仕事を手伝ってくれと親父に言われてたんで。それにのう、結婚と

言う個人的な事情も重なつたりして、タイムリングとしては会社には悪いが、今が辞め時やと思うたんじや」と答えて、コップに残っていたビールを飲み干した。明石は、M井の空になったコップにビールを注ぎながら「入社して丸7年やなあ。こんな事を、今更言うのも何やが、入社以来、本社人事部の企画にずーっといたが、色んな部門を経験させて貰つた方が、今後の仕事に役に立つたかも知

れんなあ。世の中と直接的に関わる部門の方が仕事に刺激があり、退屈しないし、それに、世の中の外気にさらされていた方が、自分の身に付くことが多いもんやで。社内向きの仕事ばかりしていたら、会社の常識が世間の常識と思つてしまうところがあるやろ。

人事部の企画は、社内向きの仕事だけで、君にとつては、面白味のない退屈な部署やつたと思うわ。七年間も、寺の小坊主の行儀見習いのような仕事をさせられてきたのと違うんか?君を他部門に出さなかつたのは、A級社員の英才教育も兼ね、企画課であれば人事部の全体が理解できると配慮があつたんやろが。それに、K内部部長が、君の個性と潜在的能力に期待されていただけに、今回、辞めるとなると、毎晩飲み屋に連れ回されて、君を慰留されるやろうなあ」と今日、挨拶の時に会つて話をしたK内部部長の話を交えて言った。

M井は頷きながら「ワシの様な小坊主社員が、いつ辞めても、人事部は何の影響もないし、替りに、活きのいい小坊主社員が来て、直ぐに仕事をカバーして、暫く経つとワシの存在なんぞは、消えてしまうもんやで」と自嘲気味に言った。

M井にビールを注ぎながら明石は「そう言つてしまえば、虚しくなるなあ。君の様な、会社人間でない、人事部的社員でもない、型に嵌らない面白い人間は、人事部の本流からすれば、B級社員の評



価値も知れんがなあ。同期生の俺としては、君に人事マンとしても、ユニークな存在感を持って、余人に代えがたいA級サラリーマンになって欲しいと期待してたんやがーホンマに残念や！」と日頃思っていたことを話した。

M井はビールを一気に飲んで、笑いながら「君にそう言って貰えるのは、嬉しいがのう。会社を辞めることを決めたもう一つの理由はのう、これはワシの生き方の本質的に関わってくるんじやが、エエかつこに聞こえるかも知れんがのう。上司を、「よいしょ」したり、心にもない事を言つてゴマをすつたりして、上手く立ち回ることが出来んのでのう。明石君もどう見ても、ゴマがすれるタイプには見えんがのう。ワシが気にし過ぎかもしれんがのう。今の人事制度の昇格はのう、一応、課長代理までが試験と上司の評価じやが、ラインの課長になるには、部長とその上のポストの人の推薦と承認がいるんやで。

君はまだ、昇格という事に関心がないかも知れんがのう。本社間接部門の連中の一番の関心事は、自分の昇格のことじや。ワシはのう、田舎もんじゃけん、そんなことを常に気にしながら、仕事するよりも楽しく、仕事が出来ることの方が大事やと思てるのでのう」

明石は黙って、ビールを飲みながらM井の話聞いていた。

「ワシは中途半端な人間じゃけん、人を

押しつけて上になるとか、人の評価を付けるような人間でもないし、又、ワシも勝手に評価をされたくないんじや。ワシは人事部に最初から向いていないと思つてたんやが。組織の中で、上に立つべき人は、能力があり、先見性と、成りより、人間的な度量のある人がなるべきと思つておるんやが。長い間、人事にいて社内の偉くなる人をワシのような下っ端が見ても、何や、この人がと言う社員が管理職になつておるんやで。君が所属している事業本部は、組織がしつかりしているだけに、ゴマすりだけで上には、成れないし、そんなおかしい人が上になつていないと、思うがのう。それ以外の事業部は、おかしな奴が課長に成つたり、部長に成つたりするんやで」

それに対し明石は「M井、それは、おかしいのと違うのか？最終的に昇格を承認するのは、人事部の権限やろ。人事部がこの人物を上げるのは、おかしいと思つたら、承認しなかつたらエエのと違うのか？」と疑問をぶつめた。「そこじや。人事部の事業部に対する、人を含めた社内的な人的情報ネットワークみたいなのが、ないんじや。事業部が上げてきた人事に対して、モノ申すだけの情報が、残念ながら人事部として無いのでのう。まあ、人を含めた情報を取ろうとしたら、所謂、事業部に対する顔がないとなあ。あるのは、唯一K内部長くらいじや。しかしのう、この人として、本社だけで

も数千人いる社内のすべての人事を掴むのは無理やわのう。人事部の社員が意識して事業部の生の内部情報を日頃から掴まないと、人事部として事業部に対して、モノを申すことが出来ず、追認だけする組織になり下がつてしまてるが。K内部長は今の人事部の実情に、危機感を持たれ、日頃から意識して情報を取るようにと社員に言われているのじやがのう。K内さんのいう事を実践してるのはのう、自慢やないが、ワシくらいなもんやで。君が言う、小坊主がするような用事でも、事業部に行つたら、まず、同期生を見つけて、駄乗りながらああじや、こうじやと情報を聞き出してらるんやで。それで、分かつたことは、女性社員すぐにお茶を出してくれる事業部は、業績も上げておるし、管理職が女子を含めた社員教育をまともにやっている部門や。女子社員の動きを見てたら、その事業部が分かるぞ。

女子社員が仕事をせずに、べちゃくちや喋り、近くの席にいる若い男子が必死になつて仕事をしている。勿論、ワシが同期と話しているのは、分かつているのに、喋っているだけで、お茶の一つも出て来ないぞ。尤も、ワシが暇で同期の処に、油を売りに来ているので、お茶などは出す必要がないと思われているかも知れんがのう。ハツハツハー」明石は、M井なりの人事部員としてのスタイルがあると感じた。

## 社会状況とカタカナ語

大江 雉鬼

先月の終わり頃だったか、インフルエンザの流行に関する報道があった。国立感染症研究所による発表で、なんでも大流行の可能性がある「注意報レベル」に達した云々。風邪をあまりひかないのは体質なのか、それとも馬鹿なのかは知らないが、この手の報道に対してはこれまでもあまり頓着したことはなかった。だが今回はちよつとした巡り合わせのせいで、頭の片隅に残ることとなった。報道に接する前日、「インフルエンサー」なる言葉に遭遇して少し慌てていたのである。今年に入ってクラウドファンディング（以下CFと略）という手法での資金調達に挑戦しているのだが、運営会社から広報活動に関する問い合わせのメールが届き、その一節に「広報に協力していただけそうなインフルエンサーの方々はいらっしゃいますか？」とあったのがそれである。

何かとカタカナ語が好きな会社であることはわかつていた。CFという手法はアメリカ発祥のもので、置き換えられた日本語の名称は存在しない。したがってその手法名をカタカナのままを使うのはやむを得ないが、CFで行おうとしている企画をプロジェクトと呼び、協賛を申し出てくれた方をサポーターと呼び、その御礼をリターンと呼び……。

確かに、これらのカタカナ語はすでに日本語化されているものであるとも言えなくはない。だが一つのプロジェクトに対して配属される担当者がキュレーターであり、今回のような問い合わせはヒアリング、そしてその一節にはインフルエンサーなる言葉……といった状況に至ると、首の一ひねり二ひねりを通り越して、感心の域に達してしまふ。

日本語として熟しているわけではないにしても、IT業界ではこれらのカタカナ語が浸透しているのは事実らしい。とはいえ、私など新しい言葉が社会に溶け込んでいく過程自体に関心を持つクちなので、IT業界のそうした趨勢にほいほいと便乗するのは憚られる。

ちなみに二〜三年ほど前のことになるが、日本語で言って欲しいカタカナ語なるものがアンケートで選ばれ、IT関連の某メディアで発表された。滑稽だったのは、その結果に対する業界人なる方の感想、いわく「あれ？ウチで使ってるヤツばっかりじゃん……」と。

アジエンダ、オーソライズ、オルタナティブ、エビデンス、バジェットなどなど、確かに鬱陶しい顔ぶれが並ぶ。しかし、当方のごとき言葉の保守主義者であっても、これらの使用を頭ごなしに難するわけではない。日本語に該当する言葉が存在しないのなら原語の音をそのまま移入するのも仕方ないし、近接する意味の言葉が日本語にあったとしても置き換

えることによつて本来の定義が霞んでしまふ概念語は原語で使うことが望ましいと考えるからである。

さて、今回の「インフルエンサー」だが、調べてみると、世間の消費行動に影響を与える人物を指すとのこと。あるタレントがテレビに出演して、何気ない会話の中で某マンガ家を好きだと発言したとする。すると翌日からそのマンガ家の人気に火が付くといったケースは珍しくないが、そうしたケースでは、発端となったタレントがインフルエンサーに該当する。要するに、流行を起こす感染源みたいなもの、ということか。それならインフルエンザのウイルスみたいなものという理解しておいてもあながち間違いではなさそうだ。

冗談はさておき、従来はこの種の影響力は、それこそ人気タレントの属性と相場が決まっていた。だが近年ではテレビを活躍の場にするわけではなく、SNSの結末点のような働きをしている人物がいて、そこから流行が発生するケースもある。その影響力は、ユーチューブで言えば、ページビューの数、ツイッターならフォロアーの数、フェイスブックの場合には「友達」や「いいね！」の数、そうした形に可視化される。その種の数値を自身の優劣に置き換えて議論する姿勢に対しては、個人的には吐き気さえ覚えるところなのだが、猫が見ているも視聴率と揶揄されながらもコンマパーセントの

競争に明け暮れるテレビ業界と同様、実体の曖昧な数字の競争はITの世界でも繰り広げられているのが現状である。

話の方向が逸れてきたので元のところに戻ろう。とどのつまりは、形態や過程はどうであれ、流行の発信源となる存在がインフルエンサーと呼ばれるのだとすれば、問題はそれを既存の日本語で言い表すことができるかである。マンガやアニメなどのサブカルチャーと呼ばれる分野なら、友人に自分の嗜好を広める行為を「布教」と呼ぶことがある。たとえば鼻疽のマンガ家の新刊が発売されると、閲覧用と愛蔵用に加え、布教用という名目で三冊目を買って、それを他人に押しつける類の行動である。それに倣うのなら、インフルエンサーは布教者とか伝道者

と置き換えられなくもない。しかしサブカルにおける「布教者」や「伝道者」がすでに比喩的な使われ方、しかも自虐っぽい風合いになっているので、注釈なしのきれいな置き換えになるわけではない。そうなると原義的なところに立ち戻つての感染源や発信源というのがもつとも近いところを掠めていそうだが、完全に適切かどうかと問われると否と断言できない。

こうしたインフルエンサーの存在が問われる状況を、インターネットが重要な役割を果たす現代社会における大衆の消費行動、もしくはそこに特有の事象と説明するとすれば、ネット社会を分析する

ために創出された概念ということになるだろう。そして、そうした分析方法が従来の枠組みに収まらないのなら、既存の日本語では代替不能の概念語に分類されるのも仕方ない。少なくとも、証拠とか予算とかの言葉で完璧に間に合うにもかかわらず、エビデンスだのバジェットだのを使うことに比べると、使用の必然性は認められる。

ともあれ、どの時代でも状況が産み落とした新語が存在することは肯わねばならない。そして状況を的確に分析するためには、特別な専門語を作り、定義の確認を怠ることなく、限定的かつ正確に用いることが求められる。今回のインフルエンサーもそうした扱いによつて初めて有効となる専門語なのである。病気のインフルエンザと響きが重なる（正確には語源が同じ）ものだから、カタカナ語に多い軽薄な新語と見られがちだが、ネット社会の分析という文脈が前提にあるのなら、不可欠な概念である。



## 追悼 小川先輩

大きな声、大きな目、小柄ながらも存在感抜群で元気だった小川さんが胆のうガンであの世に旅立たれた。

偶然にも、私が大晦日の夜、六甲山を歩いていたら冥途への旅支度をされて元旦の朝に逝かれた。

今から思えば、六甲縦走路にある「松の切り株」が闇夜のなかで白く光って私を迎えてくれたのは、小川さんの霊が私に別れを告げに来ていたからだと思える。芦屋の病院は山裾にある。見舞いに行った時にも六甲を歩いていると話していたから、きっと小川さんは、私を励ましてやろうと思われたのだろう。

十数年まえ、山岳会の阪神支部を立ち上げる時の幹事長が小川さんであった。その時、私が小川さんの補佐役になり、小川さんと親しい付き合いが始まった。会社が小さかった頃の苦労話やヒマラヤ遠征などを幾度も聞いた。

私の店が移転した時などは、わざわざ開店初日の早朝に来て塩でお祓いをして「やっていけないなら商売は小さいほうがいい。大きくなったら何かと都合なことが多い」と言ってくれて私を励ましてくれた。父が亡くなった時も、遠い和知まで葬儀に来て頂いたり、幾度も飲ませてもらったり、思い出せばキリがない。

小川さんを見ていて感心するのは、純朴さとガッツである。成功者のおごりは

少しもなく、青年のような素直な優しさとやる気のあるガッツである。

裕福な小川先輩は意外にも、私が生まれ育った田舎の人たちの気性と似ていた。食べ物の好みや話し方も。小川さんが私たちに問い続けられたのは「なんで、もっとみんなのことを考えへんのや」という反骨精神であった。豪放に見えた姿とは裏腹に、その心情は繊細で優しかった。最後に見舞った時も、ガンの末期であると言告を受けていたにも関わらず、普段通りに対応する気遣いを忘れなかった小川さんは、自分の信念を曲げず自由に生きた人であった。

ご冥福をお祈りします。  
ありがとうございます。

(喜)

## 編集後記

人の寿命は、本当にわからない。いくら元気そうであっても、いつ死ぬかわからない。九十五歳になった母も「早よう死にたい」と言いながらも口数は減らない。

考えてみたら、人は死ぬから救われる。死ねなかつたらたまりません。

自宅介護をされている人には「あと二年の辛抱ですよ。それまで頑張ってください」と言う。永年、姑さんを自宅で介護されている嫁さんは、二年が辛抱できる限界だと聞いたからである。もちろん介護する相手によるだろうが。

まあ、老いて知る人の有難さ優しさとゆきたいものです。  
(喜)



## 「うたのつぼ」

毎日の節目節目でつぶやいてみたい言葉を紹介いたします。レイアウトの都合によって余白ができた時、埋め草の代わりに入れさせていただきます。今回は「追悼」をテーマに漢詩と和歌をひとつずつ。

長夜君先去 残年我幾何 長夜に君先ず去りんたり 残んの年我幾何ぞ  
秋風襟満涙 泉下故人多 秋の風に襟 涙に満つ 泉下に故人多し

春の日の 永き別れにつくづくとなぐさめかねて 花をみるかな  
和漢朗詠集より (原詩は白氏文集)

兼好法師集より

メールマガジンの「うたのつぼ」は毎週木曜日に発行されています (無料)。  
<http://www.mag2.com/m/0001254630.html>

<広告>

## 「迷い猫笑い猫」古城悠

あなたは他人の言葉が信じられますか? 「?」以前に、信じなければ何もできないかも知れません。人にとって言葉は空気のように当たり前だからです。ある日、須田史章の中で言葉が重さを失います。嘆息一つで崩れるくらいに軽くなった言葉、その後に残った空虚さ…言葉が言葉でない世界の不気味を言葉で描き出そうと試みた野心作。



クラウドファンディング ◆「迷い猫笑い猫」の出版を通じて文体を読む楽しみを広めたい◆ (実施期間: ~3/8)

<https://readyfor.jp/projects/waraineko> または【検索/迷い猫笑い猫】

お問い合わせ office34 TEL:075-711-4688 〒603-8083 京都市北区上賀茂向繩手 2-2-12

《おこわり》支援にご参加いただくには、レディフォーのサイトにて会員登録のうえ、商品の購入予約(要クレジットカード)をしていただく必要があります。決済はファンディング成立時のみ行われ、不成立の時は予約が自動でキャンセルとなり、請求は発生しません。

その気持ちわかる!

戦後七〇年の節目の年だった。何が あったのかと、振り返ってみても、あ まりにも多すぎて。

こんな時こそ静かにもう一度、それ にふさわしい映画を鑑賞したい。山田 洋次監督の「母と暮らせば」。井上ひ さしさんの戯曲で、映画にもなったの は「父と暮らせば」。生前にその対に なる作品をぜひ書きたいと対談で話 して居られたのが「母と暮らせば」だ ったのに完成を見ないであの世へ。そ の井上さんの遺志をついで山田監督 が見事に実現し映画に。

「父と暮らせば」は広島原爆で亡く なった父と娘のふたり芝居。原爆投下 から3年後。ある男性に恋心を抱き始 めた娘の前に父の幽霊が現れる。自分 だけが生き残り、幸せになってよいの かと葛藤する娘に、父は、悲しかった こと、楽しかったことを伝えるのが仕 事だ。生き延びよ、と言って消える。 「母と暮らせば」では、長崎原爆で 死んだ医学生の子が三年後、母のも とに幽霊となって現れる。彼には結婚 を誓った恋人がいた。その彼女は彼へ の思慕を断ちがたく、亡くなった友へ の負い目で新たな恋を諦めている。

そして、息子は母を通じて、ある願 いを彼女に話した。七〇年前、多くの ささやかな家族の愛が一瞬にしてこ の世から消えた。何十万人もの人々へ の鎮魂の映画が、新安保法が成立した

年に完成したのは決して偶然ではな いだらう。

### 健康であること

週一回、自彊術に。休みながらも続 けている。六〇歳以上の女性で和やか で楽しい。

先生も女性なので、合間に交わすお しゃべりも、体調のこと、薬のこと。 それぞれ自分の健康を維持しようと 続けている人が多い。続けていると体 のトラブルが消えていくような気が する。順位は違っても家で一人で 出来る。でもなぜか皆で一緒に動くの が楽しい。テレビなどで、体操を見る けど、ベテランばかりが動いている。 見よう見まねでやっているけれど、つ いてゆけない。稽古で、みんな一緒に ゆつたりとしたリズムで動く幸せ、同 じ動きをすることで、心地よく無心にな れる。お互いの体が共鳴していくのが、 たい。みんな一緒に動くということが、 心の健康にとっても大事なんだって、 この年になって切実に感じる。

若い頃は、みんな踊ったり、歌つ たり、子どもと大人が運動会で騒いだ り、大勢で動くことがたくさんあった。 婦人会、老人会からも離れていっし よに動く機会が減っている。いくつにな っても、死ぬまで、人間は「みんな と一緒に何かしたい」それが、とって も幸せだと思う。自彊術のおかげで、

体調が良くなったのも「いっしよに動 く」の効果なのかも。

### 下手な横好き

漫画家の水木先生の死亡。新聞・テ レビなど、私もマンガが好きだから、 水木先生の本が陳列。孫から、「こん なの意味がわかるのか」と笑われたけ ど。先生が残された「幸せの七カ条」と いう言葉がすばらしい。その中の第 四条「好きの力を信じよ」これはまさ に真実。

私も書くことが好き。「好きだから うまい」とは言えない。「あのくらい の文章なら誰でも書ける」「でもゆっ くり書く時間がいいんだ」と悲観的な ことを、それぞれに言われた。でも、 私はそんなことは気にしない。主婦に そんな時間は無いのだ。その通りだか ら、私には何の反論の余地はない。好 きなこと、見たこと、感じたこと、少々 身体の調子が狂っても書く。苦痛だと思 ったことはない。いつまで、こんな 事書けるかなアと。

### 食べ方がわからない

食べ方がわからないものは、意外と多 い。レモンティにくっついてくるレモ ンの輪切りをどうしていいのかわか らなかった。しぼるのか、このまま紅

茶の中に入れるのか。入れたあと取り 出すのか、入れっぱなしなのか。

刺身のツマと一緒に出てくるピンク 色のシソの花は食べるべきなのか。私 は、あの花を醤油皿にこそぎ落として 食べていたが、別に変わらない味と思 うようになり、最近目は通して楽し むだけにとどめている。

太宰治の短編に、お金持ちの家でシジ ミの味噌汁をいただき、シジミの身を 食べて大恥をかいたという話がある。 「お金持ちは、シジミの身を食べない の」シヨックを受けた。

いろんな流儀がある。この頃は、静か に、おいしそうに落ち着いて食べれば それでいいと思う。友達と柿の葉ずし を食べに入った、いきなり葉っぱごと 口に入れ、友は「ああ、美味しい」

### 俳句

土田 裕

早春の上枝に光る雨滴かな

地に落ちるまでの輝き春の雪

料峭や

テロのニュースのしきりなる

閉じ込めし

ものを透かして薄氷

わが町を巡り歩くや梅日和